

カンちゃんと私

小坂井中・1 伊藤 朱花

カンちゃん、それはカラスです。私のカンちゃんは、足を交互に出してとことこ歩き、羽の内側が白いので、ハシボソガラスだと思っています。一般的には「ゴミステーション」を荒らしたり、突然頭を突いてきたりと、「厄介で嫌いな鳥」という印象があるかもしれませんが。カラスは縄張りがとてもしっかりしているので、別のカラスが縄張りに入ってきたり、攻め込んできたりすると、激しく空中戦をします。また、ときどきカラス会議かと思うほど、周辺のカラスがたくさん集まってきます。電信柱や電線に止まってカアカア鳴いている姿を見ると、少し怖くなることもあります。

しかし、カラスを長年観察していると、とても面白いです。表情があり、一羽ずつ顔も違っていて、かわいいです。私にとって、カラスのカンちゃんはペットのようであり、家族のような存在となっています。

私とカンちゃんの出会いは、幼稚園のころまでさかのぼります。家の前の公園に巣を作り、住んでいたカンちゃんが、幼稚園の送迎バスの集合場所へ行くときについてきたのが始まりです。毎日一緒に歩いてきて、電信柱から電信柱へ先回りしていました。カンちゃんは頭がいいので人を認識します。帰りもお迎えに飛んできてくれるうちに、仲良くなりました。いつもついてきてくれて、

「せつかくなら一緒に暮らしたいな。雨にも濡れるし、暑いときも寒いときも外にいてかわいそう、一緒にご飯食べたいし、お風呂も入りたいな。」

と、当時の私は思っていました。

カンちゃんと名付けたのは、母です。母と公園で遊んでいるカラ

スに声をかけていたら、少しずつ懐き、近づいてくるようになりました。母がカンちゃんと呼んでいるうちに、カラスは自分がカンちゃんだと思ったみたいです。母は、何羽もいるカラスみんなに、カンちゃんと呼んでいました。私は幼稚園の年中だったので、「みんなカンちゃんだったら、誰が誰か分からない。」

と言って、

「カン太郎、カン次郎、カン三郎、カンミちゃん・・・。」

と、どんどん名付けました。ただ、普段は全員をカンちゃんと呼んでいます。なぜならばカンちゃんと呼ばないと、呼ばれていない子が怒ることがあったからです。

私の家の前は公園で、ゴミステーションもあります。可燃ゴミの日に、ゴミをあさりに来ます。私が注意するとすぐ食べるのをやめますが、私がいなくなるとまた食べ始めてきりがありません。

「カンちゃん、ゴミを食べたらダメだよ。」

と言うと、僕は食べていませんといった顔で見えます。ゴミを荒らしたのは、僕ではありませんと言わんばかりに慌てふためきながら、少し離れたところに飛んでいきます。

また、曜日や時間までも認識しているなと感じることがあります。毎朝同じ時刻に私の家に来て、

「ガーツ、ガーツ」

と鳴いてくれますが、週末の朝は来ません。また夏休みなどになると数日は、あれ、学校はないのという感じで待っていますが、数日すると私が学校に行かないことを認識するみたいで来なくなります。見えないところで鳴いていて、なかなか顔を見せてくれないこともあります。気にかけないでいると関心がないのかと姿を見せにきます。カンちゃんと呼ばないと、もつと盛大に鳴かれます。そして、家族で遠出し、家を留守にする時は、カンちゃんがいなくても、「行ってくるからね。」

と、声をかけて行きますが、カンちゃんは聞こえていないのか、帰

つてくると怒り心頭のように、車のボンネットや家の窓、玄関の出てすぐのよくわかる場所に、大きなふんの爆弾を落としていきます。きれいに掃除をしても、怒りが収まるまで数日は落としていきます。恥ずかしがり屋なのか、甘えん坊なのか、寂しがり屋なのか、わがままなカンちゃんです。

仲良くなると、飼いたくなった私は母に、

「私、カンちゃんを連れて帰りたい。」

と言っていました。母は、

「カンちゃんひとり連れて帰ったら、他の子がかわいそうでしょう。僕も一緒に行きたいってなるかもしれないし、あの子どこ行っちゃってなつちやうかもしれないよ。それにカラスは家で飼えないよ。」と説明してくれましたが、

「え、なんで。そんなの嫌だよ。私は連れて帰りたいの。」

と、小さいころの私は何度も繰り返していました。しかし、飼うことはできませんでした。なぜ飼うことができないかというと、野生で暮らしているほとんどの動物は「鳥獣保護管理法」という法律で保護されており、カラスは事実上飼えないからです。最近になって母から聞かされ、理解することができました。

カンちゃんは毎年子育てもしています。繁殖の時期になると、夫婦で公園の桜の木に巣を作りました。何度も行ったり来たりして、とてもたいへんな作業だと思いますが、難なくこなしていました。この巣は毎年少しずつリフォームをしているようですが、枝が伐採されて環境が変わると、近くの安全な場所へ引っ越しをします。カラスは毎年同じペアで子育てをしています。毎年春にだいたい二つ卵が生まれ、羽化するまで卵を温めています。子育て中は外敵にも襲われやすいので、いつもとは違う緊張感があります。この時期のカンちゃんは、呼んでも知らん顔でそっけないです。子育てが終わると、いつも通りの愉快でわがままなカンちゃんに戻ります。呼ぶと隠れてしまいますが、ぴよんぴよんと飛び跳ね、つぶらな瞳で、

こちらをちらつと見ながら寄ってくるので、とても愛おしいです。

毎年、子育てはたいへんみたいで、なかなか順調にはいきません。今年は巣立ち前に一羽、道路で遊んでいる時に、車にひかれて死んでしまいました。勝手に触ることもできず、誰かが電話をかけてくれたみたいで、ごみ収集車が来ました。回収のおばさんがゴム手袋を三重につけ、ビニール袋に遺体を入れて、その後もう一回袋を入れ二重とし、そこにつけていた手袋も入れて口を縛っていたそうです。とても嚴重だと思いました。カンちゃん夫婦もその様子を電信柱から見えていて、道路に寝ていた我が子がどこかに行ってしまったことにおろおろしていたそうです。死んでしまったのは金曜日だったのですが、翌週、その翌週と、二週に渡って金曜日にカンちゃん夫婦が見に来ていたようです。我が子の帰りを待っていたのかなと私は想像しました。カラスも人間と同じように親心というものをもっているのだなと思います。

ひなは巣立ちをしてからも、近くで生活しているようで、声をかけるとガーツと返してくれます。そんなカンちゃん一族は、今では子どもの一家も増えて、縄張りこそあれ、近くの神社や線路の向こうなど、あちらこちらで暮らしています。私たち家族の行動さえも覚えられていて、そこを通る時には電線の上や電柱で待っていてくれます。縄張り争いの途中で死んでしまうカラスもいるけど、必死に自分の子どもを守り抜く、その精神はいつも見ていると感心してしまいます。

どんなときでも自分の子どもと、私たち家族を見守っていてくれる、そんなカンちゃんがとても大好きです。いつまでも近くにいて、お互いの成長を見守っていききたいです。